

文化・芸術

「花」

1916年、油彩、カンバスボード
22・7寸×15・8寸

中村 彝（1887～1924年）

個性豊かな芸術家のひしめく大正時代、東京・新宿の中村屋サロンに集った若い文人たちと交流を深め、病魔と闘いながら自らの芸術を追求した中村彝。わずか37年という短い生涯の中で、西洋絵画から吸収した養分を自らの糧とし、死を見つめ生を希求するかのような深い精神性に基づく画風を展開しました。

1916年作の本作は、白い花瓶に生けた赤い花を題材とした静物画です。病床に伏すことの多かった彝は、室内で制作できるところとした静物画の小品において、さまざまなモチーフの組み合わせや描法を試みました。

本作では、うねるような大胆な筆致でモチーフを捉え、鮮やかに咲く赤い花の生命感を際立たせています。そして、花瓶を置いた茶褐色の台と背景となる模様のある壁によって画面を斜めに分割し、構図の研究にも取り組んでいることがわかります。

この作品は、来年1月17日からのコレクション展でご覧いただけます。
（佐藤）

名画の扉

大川美術館コレクション展から

